

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

好意的及び非好意的関係・反応を連想させる英語動詞群の意味分析

著者	伊藤 幸一
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
巻	57
ページ	77-89
発行年	1986-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/4621

好意的及び非好意的関係・反応を連想させる

英語動詞群の意味分析

伊 藤 幸 一

は じ め に

「LOVE - HATE relation に還元される英語動詞群の意味分析」と言い換えた方が理解し易いか。好き・嫌いということが、人間生活において、いかに重要な要素となっているか、振り返って考え直してみるまでもない。子供や若者は当然のことながら、日常性に埋没して、隋性に流されている人も、あるいは使命感に燃え、感性などどこかへ忘れてきてしまったような人や、悟りを開いているかのような人でさえも、好き・嫌いの感情はもっている。構造的意味論にとって対象とするに十分足る意味領域のひとつではないだろうか。

程度はあれ、好きであれば近づきたくするし、自分の物にしたくなる。嫌いならば、避けたがるし拒む。好きな物を食べ、好きなことを言い、好きなことをやって、好きな人達と……いつもそうしていたいと思っははいけないのだろうか。快楽主義者は理屈をつけて説明しようとする。禁欲主義者もまた、自分の好みを正当化しようとする。美的感覚や価値感など、一見理論的で理性にかかわるか、と思わせる判断であっても、実は主観的であり、根底でいかに好き・嫌いがかわることか。

「精神的変化を連想させる」英語他動詞群と、内なる自主的感情の LOVE・LIKE あるいは HATE・DISLIKE などを中心とする意味場とは、快・不快ということで共通であっても、混同すべきではなく、別途に論じるべきことを、前者の意味分析の際に提言した。快いあるいは不快な精神状態に対しては、対応する快いあるいは不快な感情をもち、即ち、好き・嫌いを生じさせ、また、その逆もときとして成り立ち、両者は表・裏といわないまでも、背・腹の関係にあることも指摘した。そこで両者は一線を画す必要はある⁽¹⁾が、そのような

関係を導入して、後者の分析の糸口とすることは有効であろう。

妥当だと思われるので、人間関係を中心に考察するが、まずは LOVE・LIKE を代表とする快い『好意的』表現から分析を始め、次に HATE・DIS-LIKE を代表とする不快な『非好意的』表現へと移る。それぞれ、抽象的・維持的に対して具体的・一過的とも呼べる大きな分類を行なう。

対立語とか反対語は構造分析の際、重要な手掛りとなるけれど、本稿では、それにもまして重要な意味を帯びていると考えられる。しかし複数で対立しており、個々には余りはっきりしないものが多く、繁雑になるだけなので記さないが、明確なものはそれとなく理解されよう。より包括的な対立に関しては、好き・嫌いの簡単なメカニズムと共に、あとで『まとめ』で展開してみたい。

好 意 的

代表的には、ホッとさせる、元気づける、楽しませ満足させる、興味をひき魅了するなどの外的刺激によって、快い精神状態はもたらされる。特に楽しみ、喜び、満足する人が、その感情を自主的に表現するならば、どういうことになるのか。

《 》⁽²⁾ 気に入ったなら LIKE が適用されるか。好きな程度には幅がある。ときおりの軽い慰め程度から、いつも一緒にいたい程度までであろう。いつも手近に存在すれば快い状態が維持でき、辛いときもホッとするとし、元気づけてくれる。慣れ親しみ、離せなくなるかもしれない。より強い感情移入があれば、愛する LOVE へとつながっていく。愛の大きさ、深さを暗示するかのように広い意味をもつ。慣れ親しめば、自分の一部分にまでなり、自分に対するかの如く、気かけ、対処することにもなる。「相手の立場に立って考える」優しさは、相手のことを自分のこととして捕え、思いやる愛を意味する。更に進んで、自分はさておき、自分以上に大切に考えることも、神聖な愛として存在するか。今更言うまでもないが、LOVE も LIKE も本稿においては中心的表現であり、かつ以下の「好意的」表現の根底をなす。

一般的には評価されず、心密かに大切にすると、見守るとでもいいってよい愛もある。優しい心で慈しむのが CHERISH である。成長を楽しみに期待しているかのようで、はぐくむといった感じもする。ついでながら、ここで言及して

よいかどうか問題であるが、その意味で FOSTER も挙げておこう。

大切に考えるということは、愛のひとつの要素であるかもしれない。自分なりに価値があると考えて、大切にすることもあろう。特にこれには VALUE が適用されるだろう。また子供にとっての宝物のように、隠す程に大切にする場合もある。これには TREASURE があてはまるか。自分なりに賞に値すると評価して、大切にすると PRIZE といっておく。

好意的という FAVOR がとりざたされることになれば、偏向、ひいきなどが当然含まれるし、許される。しかし、程度はあれ、独善的ではなく、一応正しく評価していると主張しているのが、鑑賞する APPRECIATE である。享受して ENJOY といった趣きもある。

多少の客観性を唱えて、敬意を示すこともあろう。尊重・尊敬ということになるが、軽い感じで REGARD が、少し重い感じで RESPECT が挙げられる。その評価が共有されていることを暗示するのが ESTEEM であろうか。軽い場合もあるが、冷静に見てはいても、少しのめりこんで称賛する ADMIRE もある。自分だけでもよいのだけれど、世間でも評価され、名声・評判を得てもしかるべきことを認めるのが HONOR である。賞を出して称賛することもあろう。GLORIFY も同様に、光り輝いていて、近づきたいことを認めることか。

近づきがたさが増大して、世俗性と離れるにつれ REVERENCE, VENERATE, 更に強意の REVERE となる。恐れ多い崇敬とでもいえる神聖さを暗示する。礼拝を連想させる WORSHIP や、一般的な敬慕も含め、崇拜の意の ADORE もある。自分の存在もどこへやらといった畏敬の念は AWE であらう。

以上、一過的な場合もときにはあるが、どちらかといえば抽象度が高く、持続性のあるもので、気質とか性向とか呼べる場合もある。好意的関係を連想させるとも言えるか。以下はより具体的な、一応、一過的と考えてよいだろう好意的反応を追ってみる。好意的関係が優先して好意的反応が追従するのか、それとも後者の積み重ねの結果として前者が存在するのか、一般論は言えまい。

＜ ＞ まず、あることが運んで、上首尾であったとするとどうなるだろうか。第三者であれ、歓呼することになる。ACCLAIM で喝采して、WELCOME で歓迎して、PRAISE で称賛するだろう。LAUD は文語的で賛美の

意である。ついでながら⁽³⁾、これは快い精神状態がもたらされたわけで、既に言及した LIKE や LOVE などにもつながる。

事情でことが上手く行かなかったとするとどうなるか。SYMPATHIZE あるいは PITY で同情し、憐れむことになる。更に、場合によっては LAMENT, DEPLORE, MOURN, GRIEVE の順に激しく嘆き、憤り、ときには涙を流しながら、悲しみを分かち合うことになるか。

再起・復活を期して、最早第三者的ではなく積極的に、快い精神状態をもたらすべく、打ちひしがれた相手を、慰め、元気づけることになる場合もある。ここでは快い「精神的変化を連想させる」動詞表現がかかわるけれど、『はじめに』述べたような経緯で、具体的には敢えて記さない。

《 》 初めから、ことの次第に関係しているならば、どういうことになるだろうか。まず提案がなされると、歛呼や、あるいは LIKE, LOVE につながっていくこともあろうが、好意的に同意することになる。自分の代弁であったりすれば尚更である。一般的には AGREE が適用されるだろう。知的理解を伴っての ASSENT や、どちらかといえば感情的理解を伴っての CONSENT もある⁽⁴⁾。賛同した上に称賛も加わっているのが APPROVE であり COMMEND であろうか。

同意や称賛だけでなく、より積極性をもって支持すれば SUPPORT が包括的で代表となる。失敗のないように維持するのが SUSTAIN であり、MAINTAIN は特に精神面を強調している場合がある。後から援護するのが BACK となるか。UPHOLD は励まして保持することであろうか。

既に、手を貸しての助力も暗示されるが、より上手く行くように助言するのが ADVISE であり、上手く行かないことを危惧して警告するのが WARN である。これらを含めて軽く手助けするのが AID であろう。助けがなければ困る程ではないかもしれない。ASSIST は補助的である。更に、援助が是非必要であることを暗示する HELP が挙げられよう。

窮地に陥ったなら、同情したり、悲しんでいないで、積極的に救出する RESCUE が必要であろう。そうなる前にも救援して SAVE する必要がある。再起にかけるのはその後で、なんとか失敗のないように済ましたいものである。

《 》 同意したり称賛できるのは、一応内容が把握できた場合のことである。よく分からないことは疑問が投げ掛けられ、極端な場合は、否定・拒絶

されるだろうか。しかし、自分にだけ分かるので、あるいは自分にも分からないけれど、信じることがある。人間関係を保つ究極であり、出発点でもあろう。特に少し問題をかかえている場合は、それが明確に現われ出る。BELIEVE が包括的で一般的であらう。ついでながら CREDIT も挙げておこう。TRUST や ENTRUST の方が強意である。信頼しており、自分を任せ委ねていることを意味するのだから COMMIT にも通じる。全身全霊を DEVOTE したり、神聖に DEDICATE して献身することにもなるか⁽⁵⁾。否定的な情況であれば破滅的な行動となるが、賛意を示した場合も、ここまでやれば、称賛されるだろう。何事であれ、こう出来れば最高の幸せである。

そこに行き着く過程には、いくつかの段階があるかもしれない。疑わしくても、一応容認 ACCEPT したり、承認 GRANT することになろう。意志を通してやったり、行動を許容することにつながる。積極的に自由にさせるのが PERMIT であり、一応チェックしながら ALLOW することもある。反対しないのが LET であり、放任するのが LEAVE であらう。賛意を示した場合にも、ある程度当てはまる。

ここまでくれば、疑わしさが露呈する破目になっても、事情を鑑みて酌量して、赦すのだらう。さほどのことでなければ EXCUSE が適用される。PARDON はむしろ重大な場合を含むか。個人的に許すのは FORGIVE である。感情的ということか。OVERLOOK も、故意に見落せば、ここに適用されえる。何事であれ、許すことが出来ればと思うことはないだろうか。

自分としては許容しても、回りから攻撃を喰うことになるかもしれない。自分のことであれば当然であらうが、自分のことでない場合も、身をもって弁護や擁護に回り、守ることになる。攻撃を積極的に排除しようとするのが DEFEND であらうか。ついでながら、予め守りを堅めるのが PRESERVE であり、絶えず注意深く GUARD することにもなるが、PROTECT と SHIELD は何かを用いて守ることを暗示する。もし回りが間違いを犯していたということになると、どう処理するつもりなのだろうか。大きな禍根を残さなければと思う。

《 》 ここで、今迄とは異った視点から考え直してみよう。近くにはない物に対して手に入れたいと欲することがある。知識としてもっているが体験のない場合でもよい。欠けているからこそ満たしたいと思うのであろうか。まずは広義の WANT が挙げられる。四圍の事情を考えない積極的な欲求である。

WISH の希望や, DESIRE の要望は, 出来ればといった趣きをもつ。ついでながら CRAVE は切望であろう。HOPE は少し趣きが異なるけれどここに記しておく。また ASK, BEG, SOLICIT, REQUEST など、依頼・要請としてここに挙げておこう。

もし求めなくても、手元にいくつかあるならば、どうであろうか。自由に選択でき、特別な事情がなければ、当然気に入ったものを選ぶことになる。一般的には CHOOSE であろう。よく吟味して選りすぐるのが SELECT であり、PICK もつつくように精選することである。ついでながら ELECT は何人かで選ぶことである。これらは総括的には PREFER といえる。

選んだものが、求めていたもの、あるいは最高に気に入ったものであるとは限らない。さすれば我慢することになるだろうか。選択を拒否していないならば、まだ好意的であると考えてよいだろう。何でもよい、耐えるのが BEAR である。ENDURE は努力を暗示する。TOLERATE は STAND と共にすっと立ち、敢然と耐えることであろう。ときとして、これらの行為は、愛の証しとして称賛に値することもある。しかし、退屈とか苦悩とか不快な精神状態を連想させ、程度にもよるが、不健全な非好意的関係を暗示しているともいえる。そこで敢えて選択を行なわなかったら、どういうことになるだろうか。また積極的に選択を行なった場合でも、選ばれなかったものを話題に据えらるとどうなるだろうか。

非 好 意 的

不快なもの、気に入らないもの、期待に沿わないものは、選ばないで、排除あるいは避けるのである。自分から遠ざける、あるいは遠ざかり、非好意的反応ということになるだろうか。目の前にないものは、関係ないのである。

《 》 最も積極的には、近くにあるものを遠ざけ除くことであろう。EXCLUDE は前もって締め出し、除外することである。ELIMINATE は一般的に除去することで、追い立てて追放する BANISH や、移動させて排除する REMOVE もある。

一方、消極的には、近寄らないで遠ざかっていることであろう。危険なものであれば当然である。前もって近づかないで避けるのが AVOID であり、より強く避ける行動が SHUN である。策をめぐらしてのがれるのが EVADE

であり、巧みに切り抜けるのが ELUDE で、ESCAPE は更に上手く逃げ出すまでを含む。

遠ざける、遠ざかるばかりでなく、更に、目の前に存在しても目もくれず、あたかも存在していないかのように振舞い、無視することも、同じ仲間となろう。人間関係においてであれば、場合によっては、最も徹底した非好意的行動として解釈されえる。愛することの反対は憎むことではなくて、まさに無視することではあるまいか。積極的に無視して知らない振りをする IGNORE や、取るに足らないと軽蔑しての SLIGHT がある。DISREGARD もなおざりにすることなので、ここに記してもよいだろう。

これらは存在を認知せず、拒絶・否認していると解釈すると、また別の仲間を見い出すことになる。一般的に拒絶することは REFUSE である。REJECT は、より激しく拒否・否認して敵対をも暗示することがある。SPURN は軽蔑をもってはねつけることである。REPEL, REPULSE もはねつけることで、ここに記しても良からう。ついでながら DECLINE は丁重に断わって辞退することで、少し趣きが違うか。

関係が断たれば、不快な状態が除かれるが、人間関係においては、余り露骨には行なわれず、非好意的関係を保つことになる。そこで、以下の「非好意的」表現には、極端な場合には、そうしたい、あるいは究極的にはそうなるかもしれないことが暗示されている。

《 》 ところで、このような結果となる出発点はどこにあるのだろうか。まず、疑うことから始まるように思われる。信じることが愛に対してもつ意味を思い起こされたい。精神的に不快なものの中には、理性的によく分からないことが、まず挙げられる。納得できなくて、嘘・偽り・誤魔化しであると思い始めたら、もう好意的にはなれない。これには DOUBT が一般的に適用されるか。ついでながら SUSPECT は半信半疑である。DISCREDIT, MISTRUST も疑うことで、DISTRUST は邪推することをも含む。これらは否認や否定の DENY や、反駁の意も含む CONTRADICT へとつながる。CHALLENGE は異議を申し立てることである。

のっけから否定して関係を断った方が、問題を残さず、お互いのためになることもあろう。意地悪をしていることにならなければよいが、その前の段階で、STOP をかけて、勝手にさせないよう妨げることも起きるか。先を見越して

予防の PREVENT があり、ことの始めに妨げる HINDER がある。途中で中断させる INTERRUPT には、障害物で遮断する OBSTRUCT があり、邪魔物で邪魔する BLOCK がある。信じた場合の許容と比較されたい。

許すことが出来なければ禁ずることにもなるか。FORBID はどちらかといえば個人的に禁ずることである。PROHIBID は少し公けの感じである。それでもだめなら PUNISH して懲らしめることになろうか。自由を奪ってしまうことにならなければならないと思う。

《 》 疑わしい場合だけでなく、正しくないとか、理不尽であるとかで、やはり納得のいかない場合も、同様な反応が起きるかもしれない。しかし、ことの始めから関知していればどうということになるだろうか。当然同意せず、反対することになろう。OPPOSE は反対することであり、妨げることを暗示する。RESIST は反抗・抵抗することで、耐えていることを暗示している。更に OBJECT は不服や異議を唱え、PROTEST は抗議することをも含む。

個人的な感情的な含みをもって、非難するというより、小言をいう、叱るといった表現もここに挙げておく。怒った感じで責める SCOLD があり、とがめる REBUKE, REPROACH もあり、REPROVE, CHIDE は少しは冷静か。賛同した場合の助言と対比されたい。偉そうにして、後で自分の立場は大丈夫だろうか。

欠点、問題点など分かっているれば、理論的に批判することが出来る。CRITICIZE が適用されるか。更に非難することにもなろう。どちらかといえば個人的な責任に対して BLAME が一般的に適用される。公然と非難すると DENOUNCE となる。CHARGE になると広義も含め、告発といった趣きをもつ。ACCUSE はより一般的にも適用されるが、更に激しく、一方 INDICT となると、まさに社会的となる。正義観のおしつけにならなければならないと思う。賛同した場合の援助、信用した場合の許容と比較されたい。

疑問を感じた場合にもあてはまるけれど、非難するだけでは済まなく、より攻撃的に相手の精神状態を不快にさせるべく、行動をとることもあるか。驚かす、恐がらす、悩ます、怒らす等、不快な「精神的変化を連想させる」動詞表現がかかわるが『はじめに』述べたような経緯で、ここでは具体的表現は挙げない。

不当な扱いをして虐待することにもなるが WRONG, ABUSE, MAL-

TREAT, MISTREAT などが適用されるか。総括すれば攻撃することで、一般的には ATTACK が適用されるか。繰返しての ASSAIL, 突如の ASSAULT は激しさを暗示する。極端な場合は、うさばらし、いやがらせ、報復であったり、義憤にかられてであれ、人間的には少し問題があり、物議を醸すことになるかもしれない。賛成した場合の支持・助力・救出と、また信用した場合の献身・許容・弁護と比較されたい。

ところで、どの場合であれ、ことを運ぶに及んで、不承不承で参画していることもあろう。途中で問題点に気づき、いわば内部告発をして関係を断つこともあろう。ときには裏切る BETRAY として、逆に不信や恨みをかうことになる場合があることを追記しておく。

《 》 賛成できない、あるいは信じかねることを今迄話題にしてきたが、内心は、上手く行って欲しくないという方向で反応がなされる。その反応の結果であろうとなかろうと、上手く行かなかったならば、どういうことになろうか。今迄不快だった精神状態が快いものに変化することになろう。そこで「好意的」表現において記したように、歓呼する等、更に LIKE や LOVE にまで、反動でつながっていくことになるかもしれない⁽⁶⁾。しかし、内容にもよるけれど、単なる過失であったならば、人間の尊厳を傷つけ、疑うことにもなりかねない。

一方、これとは反対に、心ならずも、上手く行ってしまったならば、どういうことになろうか。不快な精神状態が更に倍加することで驚き、あきれるだろうか。今迄考察してきた「非好意的」表現がみな適用されえるけれど⁽⁷⁾、更に以下に言及する、どちらかといえば、一過的というより持続的とでもいえる傾向を示す表現が適用されるだろう⁽⁸⁾。

《 》 不快な精神状態に対して感情を吐露するならば、忌み嫌うということになる。極端には、避けたいという意味である。まずは軽い意味合いから DISLIKE を挙げておこう。嫌いで、慣れ親しみたくないのである。より強くこの感情を抱くと HATE となる。憎むとはいえ、こちらの方は包括的で、軽い意味合いでも用いることがある。HATE と DISLIKE は今更言うまでもないが、「非好意的」表現の代表ということになる。更に強くこの感じを抱き、理性にまで及べば DETEST ということになる。更に感情的で、ゾッとする程であれば ABHOR であり、胸くそが悪い程にいやになれば LOATHE で、

最も強意であろうか。

尊敬とは正反対の軽蔑をもって対応することになる。不快に感じての DESPISE が適用されるか。下劣であると見下す DISDAIN は尊大さを含む。怒りや非難をもっての SCORN は嘲笑まで含む。INSULT は、更に強意で、侮辱することになるか。

高く評価していないということで見下す場合は DEPRECIATE, DISPARAGE, BELITTLE など挙げられる。けなす、そしるを暗示する。嘲笑する場合は、ひやかす RIDICULE, 人まねしての MOCK など挙げられる。冷笑・愚弄にまでなると SCOFF, SNEER, JEER など挙げることができる。

侮辱に関しては、更に HUMBLE, HUMILIATE などが挙げられる。相手を卑しめ、恥をかかせるという不快な「精神的変化を連想させる」攻撃的な表現である⁽⁹⁾。相手は憤ることに対応することになるか。RESENT を挙げることができるが、これはまた、不快な恨む感情を抱くことをも意味しており、複雑な感情の循環が起きる可能性がある。

これを断ち切るべく、感情の吐露としては何があるのだろうか。罵る、呪うといった CURSE, DAMN, SWEAR が挙げられるか。不満・怒りの爆発であろう。それほどまでに下劣で、不快なことを神が存在させたことを恨み、下劣なことには、下劣な言葉で、その破滅せんことを祈るのである。非好意的反応のひとつの極をなすか。愛することに対する無視することとは好対照をなすように思える。怒ったら、人間関係はお仕舞であるともいわれるが、ここまでくれば、かえって良い結果をもたらすかもしれない。

「非好意的」表現には、説明はもとより言及さえもはばかりたくなるものが、いくつも見出しされる⁽¹⁰⁾。出来るだけそのような表現が、無意味となり理解されなくなることを祈りたい。「好意的」表現と比べると、一過的なものが多いことも、系統立てて憎いことも、究極的には関係を断つことが根底にあることと、個人的には、好意的関係を求めるし、流布していることで理解されるだろうか。

ま と め

人間は、僅かばかりであれ理性をもっているお陰で、新たな出会いは、それなりに理解・納得しながら行なわれる。前から慣れ親しんでいたかのようにあ

ったり、興味を引かれ、もっと知りたくなったり、まったく理解できず、不快で馴染めなかったりである。慣れ親しんで愛着の湧いたことは、安堵感を抱かせ、既に自分の一部となり、欠かすことが出来ないほどである。好きになるには、まず慣れる必要があろう⁽¹¹⁾。初めは理解できず、不快であったことも、人間の強さであり弱さであろうか、順応して慣れて、反動的に評価が高くなることもある。

これは幼児を観察してみると理解し易い。幼児はいつも慣れ親しんだ我家という狭い世界に居て、例えば見知らぬ人がやって来たり、見知らぬ所へ連れて行かれると、不安からか、すぐに泣き出す。いやがるものは回りが近づけないし、排除してくれる。いつも快い自分の世界で、愛にはぐくまれる。興味あることだけが新たに取り入れられる程度で、自分と一体となった回りを、良しとする価値観あるいは好みをもつ。

ところが徐々に世界が広がるにつれ、逆転して、自分に好意的でない、わけの分からない人達に多く出くわし、不信感に満ちる。ときに考え、悩み、拒絶することもあるが、順応して耐えていく。当然今迄知らなかった素晴らしいことにも出会う。自分の立場を意識して、いわば自己に目覚め、視野の広がりに対応して、価値観や好みは抽象化され、また変化する。

結局は幼児のようなエゴセントリックでもない、また、いわばナルシストでもない、自重・自尊の自分の世界を無意識に確立していくことになる⁽¹²⁾。

自分を大切にするだけでなく、回りに自分を認めてもらいたくも思う。初めから親しくなれたり、興味をもってもらえればよいが、そうでなければ、信頼に足ることを訴えるか。時間をかけて慣れ親しむのもよいが、自己主張して、しかるべき評価を得たいとも思う。

ところで評価というのは、それなりに皆が認める相対的な尺度があり、あたかも理論的で客観的であるかのようであるが、好みが大いにかかわる。物事は少なくとも二面、表と裏から捕えられ、賛・否どちらでもできる。また極端な場合は、同じに捕えながら、結論を可とするか否とするかだけの違いのこともある。更に偏見や先入観をもつこともある。何事であれ、それなりの賛同者がいるけれど、得々として行なう程に理不尽極まりない。

同時に自分も、回りの人を、関心をもって評価する。信頼に足る味方か、愉快な仲間か、尊敬すべき先達か。自分の世界を確立するには、回りに自分を認

めてもらうだけでなく自分の事のように考えられる人をも欲するのである。排除したいけれど、自分への跳ね返りを気にして、耐える相手もいるだろう。回りとのつながりを気にして、おもねないまでも穏健になって、自分を見失っている人もいるだろう。

乏しい時代は選択が出来ないので、とにかく耐え、努力の果てに何かを得る。心の触れ合いや慣れ親しむことも覚え、自分しか歩けない道を求めようともする。豊かな使い捨ての時代は情報も豊かで、いくらでも選択が可能であり、多価値の時代でもある。楽に安全に、回りと同じ最大公約数的な、表面的幸せを求めることにもなる。

どんな時代であれ、内志向型あるいは外志向型とでも呼んで分類できる若者はいる。具体的好みの変遷はあっても、相変らず、好きなものには近づきたがるし、嫌いなものには近づきたがらないだろう。

ところで好き・嫌いの中程を、言葉の上であれ、単純に、好きでない、穏やかに、嫌いでない、過激に、どうでもよいなど、どう捕えるかは議論の分かれる所である。ともあれ程度があることは明らかで、座標をとれば、中央のゼロだけが中程のことなのか、更に好き・嫌いの数目盛りが含まれるのか、どうであろうか。

本稿においては、好意的と非好意的を別々に、更に下位分類に関しては逆転も加え、論じたけれど、相互の対立が重要である。納得いかない部分も、対立させることで理解が促されるだろう。概観すれば、持続的なものの対立は、好きか嫌いであり、一過的なものの対立は、成行き次第で、喜ぶか、悲しむか、怒るかであり、あるいは意見を求められれば、賛成か反対か、更に疑わしい折にも、信じるか、やはり疑うかであり、また選択においては、取捨かである。五系統に下位分類したけれど、どれも明確に分離されるものではなく、移行・変換は、強調の仕方次第で容易に可能であろう。更にその中での対立も理解されたい。

「好意的」表現には色々あるが、非好意的反応は、選択における捨に尽き、関係が断たれてお仕舞なのである。しかし一過的な反応で、いつもそうならいたら大変なので、非好意的関係が取って変わる。人間関係は複雑で、ときには不快である由縁であろう。また、関係が保たれているお陰で、いつ非好意的反応が好意的関係に倍加して結びつくか、可能性を秘めているのである。

communication の方法論として、まず相手を怒らせ、一度喧嘩をしてからでないと、真の心の触合いはないとする心底からの信仰さえも、一顧だにせず、捨て去るわけにはいかないのかもしれない。好ましい関係ばかりになることを祈りながら、まとめとする。

「精神的変化を連想させる」表現との関係も含め、かなり大胆な単純化により、この基礎的な意味場の構造は、それなりに解明されたと思う。思わぬ誤解があるかもしれないが、補強はまたの機会に譲る。

注

- (1) そこで「精神的変化を連想させる」具体的表現は本稿では言及しない。
- (2) 分節したいのだが、適切な見出し表現が見つからず、便宜的に、この記号を用いておく。
- (3) 自動詞の PLEASE, DELIGHT などを挙げたいところである。
- (4) 同意を表すこれら三表現は自動詞であるが、敢えて記した。
- (5) OBEY や SUBMIT は別としても FOLLOW など言及したいところである。
- (6) 「ざまあ見ろ！」といった感じで、後述の嘲笑などにもつながっていくか。
- (7) 場合によるが、いわば物議を醸すような行動に走らなければならないと思う。
- (8) この系統の「好意的」表現と比較すると、一時的といった方がよい表現が多いが、一応こう記しておく。執念深いことは自分自身を疲れさす。
- (9) 定義からは両者の特徴を合わせもち、中間に位置すると考えてもよい。興味をそそる表現である。その他にも仲間として考えられるだろう表現がある。
- (10) そこで、余り言及がなされないものであろうか。一方、「好意的」表現、特に愛に関してはよく見かける。
- (11) 慣れ親しむことで不仲になることもある。慣れなくても親しんでいなかったのか、慣れすぎて、いわば鼻について、問題になってきたのか、どちらであろうか。
- (12) 新たな造語は可能であるが、辞書に載っているものは、それなりに練れた表現であると考えられる。SELF- に本稿で扱っている表現をつけたした形を多く見る。何を物語っているのだろうか。